週刊ポスト 2020.4.6(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第115回 『レッツゴーヤング』とサンデーズの功績

無観客興行で話題になった大相撲春場所でしたが、昭和50年代後半、日曜日の大相撲中継終了後、NHKテレビから決まって流れてきた歌がありました。日曜の午後6時、それまで大相撲中継で親の世代にチャンネル権を握られていたヤング世代が、今度は「自分たちの見る時間」とばかりにチャンネルを変えずに見入った音楽番組、『レッツゴーヤング』のテーマソング『ムーンライト・カーニバル』です。

レッツゴーやヤングという漫才師のような言葉自体が時代を感じさせますが、郷・野口・西城の新御三家を筆頭に、キャンディーズ、ピンク・レディー、アグネス・チャンなどが続々と登場するこの番組は、ビッグアイドルを楽しむだけでなく、初々しい新人歌手がトップアイドルに成長していく過程を堪能することもできました。また、家庭用ビデオの普及とともに残された映像は、昭和のアイドルを語るには欠かせない貴重な記録になっています。

昭和49年4月に始まった番組は12年続き、ピークの昭和56年当時の最高視聴率は25%超を記録、その前年の55年にデビューしたアイドルといえば、松田聖子をはじめ、柏原よしえ、河合奈保子、田原俊彦、近藤真彦といった豪華陣で、彼らが入れ替わり立ち替わり番組に登場することで視聴率は上昇していきました。

もう一つ、この番組の魅力としてサンデーズの存在を忘れてはいけません。サンデーズとは番組内で企画され、番組内でしか見られない若手アイドルたちの男女混合ユニットです。結成初期にはブレイク前の松田聖子もメンバーに入っていて、先輩メンバーの倉田まり子や浜田朱里などの後ろで歌っている映像を見ると、まだ垢抜けていない可愛らしさが残っています。サンデーズは年度ごとに4月に入れ替えがあり、田原俊彦や松田聖子などは1年で卒業し、空高く翔び立ちました。

ほかにも代表的なメンバーとして、太川陽介、川崎麻世、渋谷哲平、堤大二郎、ひかる一平、日高のり子、佐久間レイ、植草克秀、中村成幸、大沢樹生、保坂尚輝、長山洋子など、後年、別分野で活躍する人たちが名を連ねています。デビュー間もない彼らにとって、完成から日も浅かったNHKホールの大舞台に登場し、ビッグバンドをバックに黄色い大歓声の中で歌い踊る感激は、どれほどの緊張と喜びを伴ったことでしょう。

微笑(ほほえみ)を交わしたら
ほら　君も仲間さ
コイン　指ではじく様に
涙を捨てればいい
愛の翼　胸にひろげ
きらめきの中で
ときめきの中で翔び立とう明日へ
Oh yeah!　翔び立とう明日へ
『ムーンライト・カーニバル』

メロディーとともに、サンデーズの歌声、後ろで踊るヤングメイツと称していたスクールメイツの姿が甦ってきた読者もいることでしょう。一時期、番組の司会も担当していた平尾昌晃が遺した「元気の出る昭和歌謡ポップス」の名曲ですね。

JASRAC出 2003247-001

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中